

# 20世紀の歴史を語る

短し 20世紀の歴史を語る

ISBN4-87652-220-0 C0036 P1751E  
教育史料出版会/定価1751円(本体1700円+税51円)

【討論】  
回転した  
世界史を語る

- 田口富久治 名古屋大学 名誉教授
- 山川暁夫 大阪経済大学 教授
- 加藤哲郎 三友堂 代表
- 稲子恒夫 名古屋大学 名誉教授

構成——有田芳生

教育史料出版会

教出

## 【序章】世界史の転換点に立つて

- 歴史の根本的再審と未来への豊かな構想を、田口富久治 12  
社会主義を信じ続けてきた人たちの共有の志を信じて、山川暁夫 16  
一九九一年から一九一七年を問う、加藤哲郎 20  
社会主義はなんだったのか、稲子恒夫 24

## 【I章】二二世紀はどのようなか——資本主義と社会主義の行方

- 討論のはじめに 30  
「短い二〇世紀」の終焉 33  
脱システムは幻想だったか 36  
資本主義世界システムが飲み込んだもの 40  
二二世紀のシナリオ 42  
危機乗り切りの表と裏 47  
社会主義崩壊の要因 51  
近代国家における「コントロールの弁証法」 54  
世紀的視点で現代をとらえる 58  
四層の転換が起きた時代 62  
地球の南側と北側の矛盾 68

## 【II章】ロシア革命とはなんだったのか

- 一九一七年から一九九一年へ 76  
ロシア革命の功罪 81  
ロシア革命は社会主義革命か 86  
二二世紀を生きるために二〇世紀の歴史を見直す 93

## 【III章】社会主義理論の再検討

- マルクス・エンゲルス・レーニン理論の有効性 100  
自己反省をともなう人間解放思想の再構築 105  
社会発展段階論の有等な役割 108  
「生産力と生産関係の矛盾の矛盾」 111  
科学的社会主義論の非科学性 114  
史的唯物論の再吟味 117  
科学的真理を占有する悲劇 121  
ソートシヤリズム思想の復権 125  
社会主義を再検討するスタンス 128  
資本の国民性と世界性 132  
パーティは終わったか 135

#### [IV章]世界史変革の主体はだれか

- 消えゆくレーニン・コミンテルン型共産党 112
- レーニンからスターリンへ 146
- 党は必要か 149
- 党のリーダーシップは党のコントロール 153
- イタリア左翼民主党から学ぶこと 157
- 特権階級を生み出す党組織論 161
- レーニンの欠落が招いたもの 165
- 「権力をとる」ことではなく「権力になる」こと 168
- 世界の政治的集積のポイントとしての日本 176 172
- どんな社会をめざし、いま何をなすべきか 176

#### [終章]討論を終えて

- 国際的・国内的に創造的代案を、田口富久治 184
- 生存権をかけた抵抗権の思想を、山川暁夫 188
- 「日本の謎」を解かねばならない、加藤哲郎 192
- 社会主義と民主主義、細子恒夫 196

「歴史を愛して」は持続するか、あるいは「七五七」の時代を辨す、有田芳生 199

本書の討論は、私にとっては、一回り上の世代に属する先輩たちとの楽しい知的ゲームであった。ゲームというと不謹慎に聞こえるかもしれないが、討論のなかで既成の観念・枠組みを問い直し、新たな視角から歴史と現実が見えてきたとき、ある種の知的喜びをおぼえるのは、さげられない。とりわけそれが、人類の歴史全体と、地球的規模でのトータルな社会把握にかかわるペライムについてであれば、なおさらのことである。

もつとも「社会主義」や「ロシア革命」が、どの程度に世界史的意味を持っていたのかが、改めて問われなければなるまい。ユダヤ教、キリスト教、仏教、イスラム教など、いまなお地球上の多くの民衆をとらえてはなさない世界宗教は、幾世紀にもわたる試練と紆余曲折を経験している。思想・運動としてたかだか一六〇年、現実の国家制度として八〇年ももたなかった実験は、いったい、いかなる形で歴史に残りうるのだろうか？

討論のなかでも述べたが、むしろ、「社会主義」と「現存した社会主義」を同一視するわけには

ない。社会主義とマルクス主義理論も等置するわけにはいかない。「社会主義」の思想が、

「社会主義」であり「市民社会主義」「自

民社会主義」であることがあり、その「仮構」が問題となる。そのためには、レーニン、エンゲルスはもちろんのこと、「マルクスにかえれ」でも不十分である。マルクス以前の「空想的社会主義」や、「社会民主主義」の諸潮流、「異端」とされたさまざまな思想・理論をも、見直す必要がある。なによりも、二二世紀を目前にした現段階の資本主義世界システムを分析し、それに対するあらゆる「反システム運動」から学ばなければならない。そうした対抗思想・批判理論・新しい政治文化が、「社会主義」なり「共産主義」なりの名辞でよばれるか否かは、本質的問題ではない。いわゆる「生産手段の社会化」も、「民主主義」概念を経済的・所有論的次元に深化し、地球大のグローバルな構造に及ぼす——「地球市民主義」——ならば、その実質的に含意された平等・連帯の理想を包摂することができる、私は考えている。

本書で私が主張したいま一つの点は、「共産党」という特異な政党の歴史的崩壊の意味と、その根拠である。詳しくは拙著『コミンテルンの世界像』（青木書店、一九九二年）を参照してもらいたいが、もともと「共産党」とは、第三インタナショナル（一九一九—一九四三年）の系譜の政治組織の、存在証明であった。私が「レーニン・コミンテルン型の党」とよぶ、世界的規模で軍隊的規律をとる世界観政党のみが自称してきた、独特の政党類型である。それは「世界政党」であったがゆえに、本部（モスクワ）の決定を無条件で実行しなければならない組織であり、また実行してきた組織であった。

かつてのコミンテルン日本支部＝日本共産党は、ソ連共産党の解散を「もろ手をあげて歓迎」しているらしい。それが「覇権主義・大国主義の党」であったからだという。

一九九〇年六月に、私は、『日本共産党への手紙』（松岡義夫・有田芳生題）という教育史料出版会の本に寄稿した。予想外の大変な反響で、多くの読者から手紙や資料や激励の電話をいただいた。この場を借りて、厚く御礼したい。同時に、「科学的真理の審問官ではなく、社会的弱者の護民官だ」という私の提言を、日本共産党の幹部の人たちは「悪意の中傷」と受けとつたらしい。同党の機関紙には、私に対する、学問的には貧弱な「科学的真理の審問官」風「批判」がいっぱい載った。そのうちもつともつまらぬ「批判」をした一人が、なぜか抜擢されて書記局長とかなった。

戦前日本共産党の全歴史は「コミンテルン日本支部」としての活動であった。その「天皇制打倒」のスローガンを含め、モスクワからの指令＝「覇権主義・大国主義？」なくしては、存在そのものがあえなかった。「八月革命」で封印されていた旧ソ連共産党公文書館の膨大な史資料が、米国会図書館が協力して整理され、世界の研究者に全面公開されることになった。日本共産党は、イタリアやフランスの共産党はモスクワから資金援助を受けていたが、日本共産党にはそれがなかったと大々的に報じている。それは、いつからのことなのだろうか？ 戦前について

れているという自覚はあるのだろうか？ 同党がコミンテルンの理論的・思想的遺産をひきずっていることは、現行綱領・規約に残る「ブルジョア民主主義革命」「社会主義」「民主集中制」理解や、「客観的條件の成熟と主体的条件の欠如」の提起にいたるまで、一目瞭然である。この伝統をひきずったままで政權をめざすのでは、地域や職場で「社会的弱者の護民官」として日本の民主化に努力している善意のふつうの党員の人たちの献身的活動は、むくわれたいのではないか？ もつとも、コミンテルンの思想と理論で育てられ、それを獄中で凍結・保存させたまま戦後四五

年を生きてきた指導者をいまだにトップにおいているのだから、当然といえば当然なのだ。そして、一九九一年ソ連「八月革命」が聞かされたものは、まさにその日本的「当然さ」である。「万世一系」の天皇制と、いまや世界最長不倒になった自民党の「一党支配」と、コミンテルン育ちの共産党トップ指導者を合わせ持つ超経済大国——この「日本の謎」を解くことには、日本ばかりでなく、世界の反システム運動も、二一世紀を展望しえない時代なのである。

て出てきた企画が本書である。

人選は簡単だった。いま私たちが話を聞いてみたいと思った人で座談会に出席が可能な専門家をあげてみた。思ったとおり、声をかけた方々は即座に快諾してくださった。

討論は九一年一月七日に東京で行われた。午後一時半ごろに始まった熱い討論は七時すぎまで続いた。だが語り残した課題は多い。日本の現状をどう判断し、それを打開しようと考えている人たちに何が求められているのかがもつともつと語られなければならなかった。あるいは日本の社会主義勢力の歴史的総括なども必要な課題であった。

もつともこれらの課題を何人かの専門家だけでまんべんなく語ることは無理がある。この討論で語られた立場と方法をひとこと言え、あらゆる先入観や既成観念から自由であれということだ。自分の頭で考えることこそがいま求められている。この討論全体のメッセージが読者のみなさんに伝われば幸いである。

激突はなほだしい世界に噛みつくような思いを常に燃えさせたことが、この時代に生きる人間の醍醐味だと私には思える。いまこそマルクスが生産を貫いて保持したモットーが必要とされる時代ではないか。「すべてを疑え」と――。

(一九九二年一月二五日)

田口富久治 (たぐち ふくじ)  
1931年秋田生まれ。名古屋大学法学部教授。「政治学の基礎知識」  
「日本政治学史の展開」「21世紀の世界はどう動くか」ほか。

山川曉夫 (やまかわ あきお)  
1927年福岡生まれ。大阪経済法科大学教授。「アメリカの世界戦略」  
「80年代」「新たな戦線」「85年体制への序章」ほか。

加藤賢郎 (かとう けんろう)  
1947年岩手生まれ。一橋大学社会学部教授。「東欧革命と社会主義」  
「社会主義の危機と民主主義の再生」「コミンテルンの世界像」ほか。

稲子恒夫 (いなこ つねお)  
1927年東京生まれ。名古屋大学名誉教授。「革命後の法律家レーニン」  
「ヘレニストロイカは進む」「現代のアメリカ政治学」(監訳)ほか。

有田芳生 (ありた よしよ)  
1932年京都生まれ。フリージャーナリスト。「日本共産党への手紙」  
(著者)「原爆運動と若者たち」「幸福の科学」を科学する」ほか。

短い20世紀の総括

1992年2月25日 第1刷発行

著者 田口富久治・山川曉夫・加藤賢郎・稲子恒夫  
編集 有田芳生  
発行 橋田常俊

株式会社教育史料出版会  
〒101 東京都千代田区三崎町1-2-2  
☎03(3291)3571 FAX03(3291)3572  
郵便振替「東京2-79022」

印刷 埼玉福祉会／平河工業社  
製本 三森製本

定価はカバーに表示してあります。  
落丁・乱丁本はお取りかえいたします。

ISBN4-87652-220-0 C0036 P1751E